

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	横田 満 印
所属機関	公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	European Society of Coloproctology (ESCP) 12 th Scientific and Annual Meeting (第12回欧州大腸肛門病学会) 学術集会)
渡航期間	自 2017/9/20 至 2017/9/22
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	直腸癌術後長期生存をえた高齢患者における排便機能と QOL についての検討
研究成果 (要約: 800 字)	
<p>直腸癌に対する低位前方切除後の排便機能低下は術後 QOL に関わる重要な問題である。とくに高齢者では生理的に排便機能低下を伴うため非高齢者に比べてその影響が強くなる可能性がある。今回、直腸癌術後長期生存し高齢となった患者における排便機能と QOL の関係について検討した。</p> <p>【対象と方法】対象は直腸癌術後 5 年以上経過した 131 人にアンケートを郵送し回答を得た 86 人 (66%)。アンケート回答時の年齢を元に 75 歳未満の非高齢者群と 75 歳以上の高齢者群に分けて解析した。排便状況に関しては、Wexner スコア、FISI スコア、LARS スコアを、QOL に関しては mFIQOL と SF-36 スコアを用いて評価した。</p> <p>【結果】86 例の内訳は、男性 56 人/女性 30 人、腫瘍部位 Rs 5 例/Ra 37 例/Rb 42 例/P 2 例、ステージ 0 4 例/I 29 例/II 26 例/III 25 例/IV 2 例、術式 低位前方切除 (LAR) 56 例/ハルトマン手術 6 例/直腸切断術 24 例。非高齢者群 (52 例) の年齢中央値は 67.5 (43-74) 歳、アンケート回答時の術後経過年数は中央値で 8.5 年、高齢者群 (34 例) ではそれぞれ 81.0 (75-91) 歳、9.0 年。</p> <p>LAR 後の非高齢者群と高齢者群を比べると Wexner スコア : 4.0 / 6.0 (p=0.25)、FISI スコア : 8.0 / 12.0 (p=0.57)、LARS スコア : 27 / 20 (p=0.11)、mFIQOL : 9.5 / 4.8 (p=0.63) と有意差を認めなかった。SF-36 のサマリースコアはストーマをもたない高齢者群 (15 例) に対し、ストーマをもつ高齢者群 (18 例) で PCS (37.9 v 36.7; p=0.95)、MCS (57.1 v 55.6; p=0.58)、RCS (43.5 v 45.5; p=0.45) と同等であった。</p> <p>【まとめ】直腸癌に対し低位前方切除を受け、長期経過し高齢となった患者の術後排便機能と QOL は許容されるものと考えられた。</p>	